

ければならないのは、問題意識として「近代科学」にもとづく経済学を規定するための人間の本質的行動としての経済現象をどのような概念の下に把握するかである。それは所有・消費・生産といった根源的経済現象を主体者の認識過程の中でいかに把握するかということである。そして、その根源的現象を概念として定立しうることによってはじめて、(文化) 価値を前提にした ding an sich (物自体) の哲学から、人間の哲学への脱皮と、経済現象の実在性の分析へと入ることができるようになるのである。さもなくば「(文化) 価値」の前提は生成成物の実在を前提していることで、その生成現象の認識を ding an sich にしか見ることができないからである。換言するならば、所有するもの、消費するもの、生産するものの認識から、所有・消費・生産行動のその Solan の規定へと進展しなければならぬということである。

(経済哲学の本質にむかって)

前記の理由から、人間の本質的行動としての経済現象自体を認識し、定義することによって「近代科学」としての経済学の問題意識を規定しうるし、またそのうらづけとなる形而上学と「経済認識論」の構築を可能とする第一歩を得られると、筆者は確信するものである。このような作業を進めるにあたって先ず経済を形成する「根源概念」を明確にしなければならぬ。これは、かつてキルケゴールがしたように概念 (Begreif) として定立していない「不安」等の人間行動のカテゴリーを「概念」として設定することが、その「概念」とする規定へ向う自己の生成の過程—即ち概念の内容を問題として、新たにそれを認識の内容とすることと類似している。まさに、「原罪」が倫理的規定であったものから、「原罪」とそこに至る「人間」の関係が明確にされるといったことと軌を一にしているのである。

そこで「根源概念」として消費・生産・所有という経済行動を定義して、それを認識論構造の中に包接して「経済哲学」の解明をしたいと思う。

筆者はこのために、一つの試みとして、その道具を形而上学と認識論が密接に結びついている「仏教哲学体系」、なかでも筆者が最も親しみを有す「パーリ仏教」のアビダンマ哲学の体系に求めることにした。これによって、カント体系やヘーゲル体系を用いて展開された「経済哲学」の難点がいくらかでも克服される可能性があると考えられるからである。

(追記)

以上は「仏教経済哲学試論」の序(問題提起)を簡約したもので、本論はかなり包接的内容を有すため「研究所報」の一号分に所載させる形にまとめられず、こゝに以

上のような形で述べることにした。現在のところ

『神山経済論叢』第二巻(昭和五九年)京都産業大学に所収の

「仏教経済哲学試論—Economics in Buddhist Epistemology」

が未了ながら最もまとまったものとして公刊されているものであるので興味のある方は御一読されたい。

未完

## 初期有部阿毘達磨仏教の状況(上)

榎田善夫

阿毘達磨仏教が、部派仏教研究における宝庫であると言われる所以には、一つの重要な意味があると考えられる。それは、歴史的な関係性いわゆる仏教史の解明と思想的な考察が密接な関係をなし、その二面が同時に進行できうることになる。これは、仏教における最重要課題が阿毘達磨において集中しているとも言えるが、又奇妙な阿毘達磨の性格にも帰するものがある。

その奇妙な性格とは、各部派間の相違点、又は各部派間の関係性への注目目して、意識的に思想的な場面の考察を避けてきた場合に、その関係性が裏を返せばそのままの姿で思想的考察になり得ると言えることである。関係性のみを追求すること、それがそのまま思想的な全体像をえがくことになる。又、関係性の中に思想的な要素である各部派の目差す目的、或いは方法論までもが表現されていること。このことは、部派仏教が恐ろしくプラグマティックな一面を持つものである。思想的全体像が関係性の中で解消しうるということとは、生きた思想、生きる為の思想としての実践的な意味を持つものとも言える。そこに阿毘達磨の本来目差す科学性が具なわっているとも、実践的であるからこそ宗教的であるとも言えるものである。そこで、各部派間の教学上の問題を考察する私の作業の積み重ねが私自身の大きな課題とする、有部阿毘達磨思想史の解明への糸口へと繋がると思われるのである。

すでに私は仏教文化研究所所報第2号「説一切有部の一問題点」と題する序文で、これまでに進めてきた作業の概観を示したが、今それらの各作業をベースにして論を進めてみたい。それらからは、地域と時代差による以下の様な六図を画くことができ

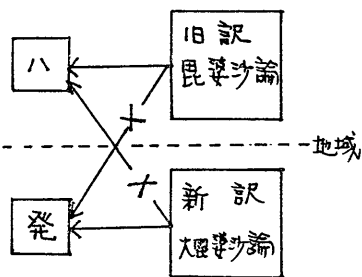


図 ①

まず第一段階で行なった作業では、玄奘訳の阿毘達磨大毘婆沙論二百巻と浮陀跋摩・道泰等訳の阿毘曇毘婆沙論六十巻が引用する異本の発智論を十四項目に互り検討した結果、発智論と新訳大毘婆沙論はカシュミラ学派の論書と註釈書、また八健度論と旧訳六十巻毘婆沙論はガンダーラ学派の論書と註釈書としての性格を具えていることが確認できたのであった。その中で最も際立った特徴ある関係を図示したものが①の図である。

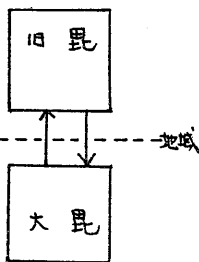


図 ②

次に、大毘婆沙論と旧訳毘婆沙論を平行させて読み進めていく場合に、「業の異熟とその果報」、「厭の定義」の個所などから、両毘婆沙論の教学が註釈書の時代に入ってから始めてお互いに影響し合いながら確立されたことが知られたのであった。それを表わしたのが図②である。

また、先の新旧両毘婆沙論に引用する異本の発智論を検討した中で、八健度論と旧訳毘婆沙論の特徴がどちらも六足論の識身足論に反対論者とされる補特伽羅蘊での補特伽羅論者、目乾連蘊での沙門目連と呼ばれた過未無体論者の側と同様な教学的立場であったことを図③の様に表わすことができる。識身足論中でも同じでも結論だけが入れ替わっていたことは、その教学的態度に注意しておかなくてはならないと言える。

以上から、この様な八健度論・旧訳毘婆沙論の教学的特徴を表現しているものが、大毘婆沙論巻七十一に出てくる「旧外国師同此国説。旧此国師同外国説。」の中の「旧此国師同外国説。」の意味するところと想定したのであった。

次に、大毘婆沙論の学説、又カシュミラ国毘婆沙師として引用される学説が現存の六足論に直接に結びつかず、むしろ六足論の学説が大毘婆沙論に引用する西方師説に繋がる場合があることが指摘できる。この問題を纏めたのが、先記の論文「説一切

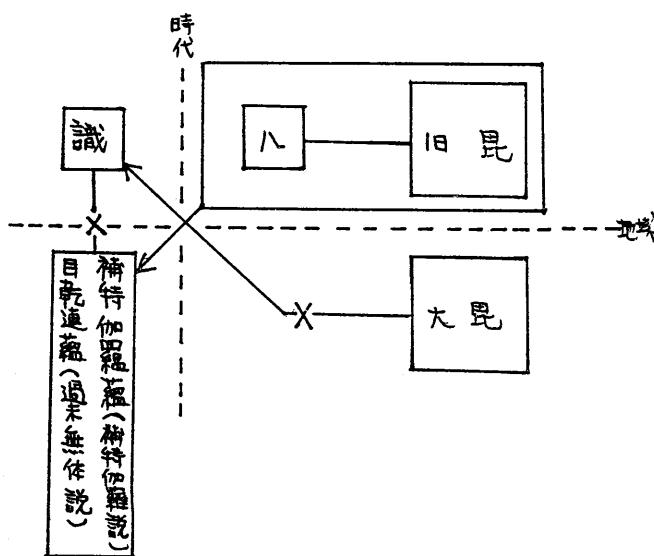


図 ③

有部の一問題点」の本編であった。第一例は、二十二根中の無記根についてである。

大毘婆沙論ではカシュミラ国毘婆沙師が三無記根説、西方諸師が四無記根説として引用したが、現存の品類足論、異訳の衆事分阿毘曇論は共に西方師説の四無記根説を称えていたことが知られた。その関係を図④として表わした。

第二例は、同じく大毘婆沙論が引用するカシュミラ国所誦の品類足論が九十三随眠の中で三十三随眠を遍行随眠、六十五を非遍行随眠とするのに対して、西方尊者所誦の品類足論では六十五を非遍行随眠とするが、三十三随眠については二十七は遍行随眠、六随眠は遍行・非遍行どちらにもなるとするのである。この問題でも現存の品類足論・異訳の衆事分阿毘曇論は、共に西方尊者説の立場と共通していた。それを図⑤とした。

第三例として取り上げたのは見道説であった。この問題は、発智論が見道十五心説、八健度論が見道十六心と両論書の最も際立った相違点の一つと従来されてきた。

大毘婆沙論は、この十五心見道説に対して独自の教学的立場から理由を述べるが、そこで八健度論の見道十六心説を外国師説として紹介している。現存の集異門足論は、この両説以外の、十七心見道説とも言える説を立てていたことが知られた。この特異な見道説は、大毘婆沙論が説く見道十五心説、別の個所で引用する西方諸師説とを検討した場合に、西方諸師説に近い立場であると言えるものである。

大毘婆沙論は、見道の第十五刹那で「道類智忍生、除其自性相応俱有法、於余

一切、類智品道<sup>ニ</sup>を「多分」と称する法を現観し、第十六刹那では「道類智生<sup>ニ</sup>」於<sup>テ</sup>道類智忍、自性、相応、俱有法<sup>ニ</sup>を「少許」とする法を現観する為<sup>ニ</sup>、見道を十五心説と考へることが許されるとする。これに対して西方諸師は、道類智忍を「少分現観」、道類智を「尽現観」とする術語で呼んでいたことが推定でき、この西方諸師の考え方から集異門足論に表現されている「從<sup>ニ</sup>道類智趣<sup>ニ</sup>道類智<sup>ニ</sup>」の様な道類智の現観が再度行なわれる見道十七心説の立場を取ることが推定できる。これを図示したのが図⑥である。

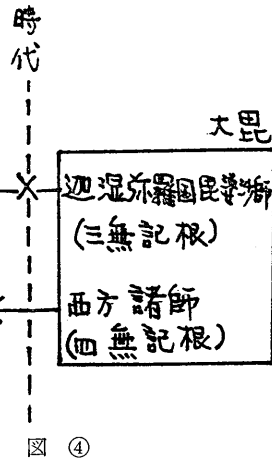


図 ④

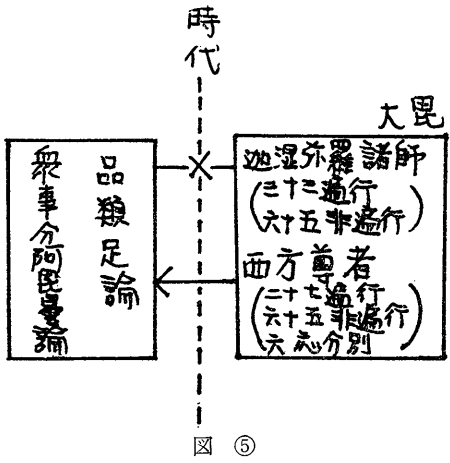


図 ⑤

さらに別な面からこの問題を考えた場合、大毘婆沙論が「道類智忍の自性と相応と俱有法を除く、余の一切の類智品道」を「多分」と呼び重要視することは、仏教学の縁起論である自性や相応法や俱有法の術語で包括されていた既成の法に対する関心以外のもの、つまり「余の一切類智品道」の言葉で表現される、新しい法の探求に目が向けられていたと言ふことができる。これに対して西方諸師の方は、この自性・相応法・俱有法の既成の縁起、言わば伝統的ダルマを重く見る所にその学派としての性格が伺えるのである。ここから時代的前後を考えた場合、西方諸師の態度が古く、カシュミール国毘婆沙師の大毘婆沙論の方が時代的に新しい立場と考へるのが自然なものとなる。又、九十八睡眠中の遍行と非遍行の中で、西方師説を「如<sup>シ</sup>是所説於<sup>シ</sup>義為<sup>シ</sup>善」と認めることは、西方師の立場の方がむしろ上座部的とも言えるものがある。

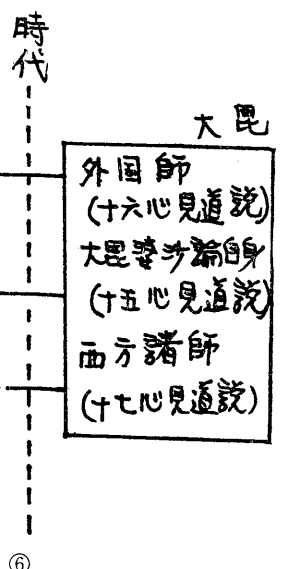


図 ⑥

は初期阿毘達磨論書の成立問題は別として、六足論から大毘婆沙論への発展と西方師からカシュミール毘婆沙論師への発展が平行すると想定できるならば、品類足論・集異門足論が西方師の学的影響下にあること、西方師の学説をより発展させたものがカシュミール国毘婆沙師の大毘婆沙論であるとする仮説が成立することになる。この様な中で、現存の発智論はカシュミール学派の説一切有部化がなされているものと考えられるのである。

この三例の中に、私は先の大毘婆沙論の残りの文章である「旧外国師同<sup>ニ</sup>此国説<sup>ニ</sup>」の意味するところを推定したのであった。

以上、此等の六図を総合して考へた場合、次の様な⑦の構造の図が画けることになる。結果的にこの図は図③に近い型態となるが、ここに西北インドの阿毘達磨仏教の状況としてカシュミール国毘婆沙師以外に、西方諸師、又は西方尊者と呼ばれたもう一つのグループの存在が確認できる。さらに、図③の八鍵度論と旧訳毘婆沙論の教学的特相が現段階では識身足論の目乾連經・補特伽羅經と同一グループの下にあることよりより以上の指摘が可能となっていない点からして、合計三つの大きなグループの

さらに言えば、教学的に西方師の立場をより発展させたのが、カシュミール国毘婆沙師の立場であること。時代的にも、西方師の立場からカシュミール国毘婆沙師の立場へと発展したとする想定が考えられる。

一般に六足論・発智論の有部七論は一纏りの論書と考えられてきたが、先の集異門足論と発智論の見道説が別々であったことから、ここで

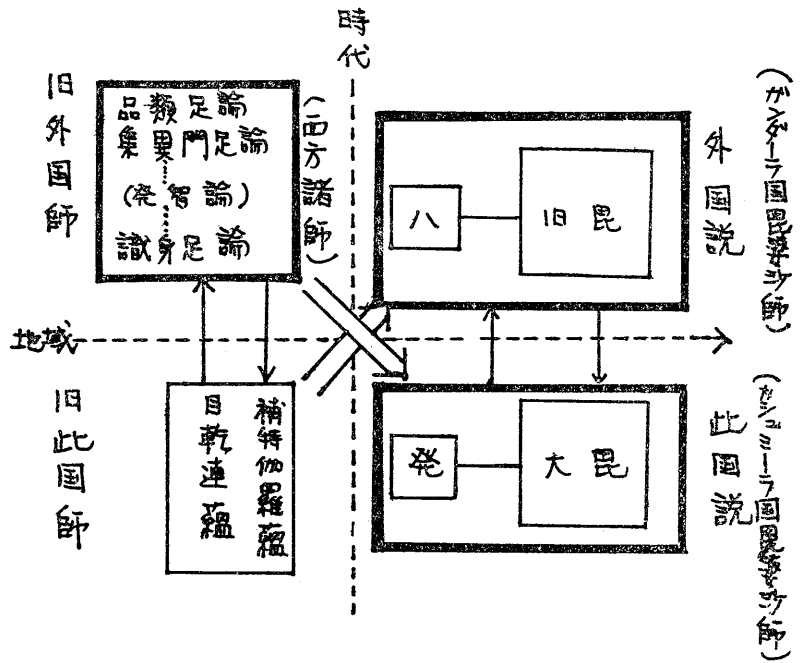


図 ⑦

存在が想定できようになる。

### 補陀落渡海の基盤と渡海ルートについて

妹尾 匡海

補陀落渡海は、未解明の部分が極めて多く日本の宗教史の上で大きな謎とされている。この補陀落信仰について、成田俊治佛教学教授は昭和三十三年に『補陀落信仰の性格』<sup>①</sup>という論文を発表しておられるが、その中で成田教授は、日本における補陀

落信仰がおよそ三つの発展段階においてとらえられることを指摘しておられる。

すなわち、一、補陀落浄土を説く華嚴経等の輸入以後、補陀落山を一種の他界浄土として、死者の行き住むべき菩薩世界として意識せられていた段階。二、那智山を補陀落山に模し、観音の所住地とし現世的宗教霊地として考えられ信仰されて来た段階。三、こうした那智山を補陀落山と考えると共に、それより更に進んで中国の補陀落山に参詣しようとする意欲、補陀落渡海といわれる信仰形態の発生。

以上が、成田教授の論考される補陀落信仰の発展段階であるが、この説は現在ほぼ定説化されているといつてよいものである。

とくに、第三段階の補陀落渡海信仰は、補陀落信仰を特徴づける最大のものであるが、これは日本古来からの一種の神仙思想、すなわち、海の彼方に実在する一種の仙境に対するあこがれを基盤とする信仰であることを成田教授は指摘しておられる。たとえば、神話として広く知られている浦島太郎の物語や海幸彦山幸彦の伝説は、人間界とは次元を異にした幸福の源泉地としての常世国、海神国でありながら、そうした国へ行けるという可能性、すなわちこれは現世の延長とすることをこころした神話は示しているものであり、日本で独自に展開した補陀落渡海の基盤には、こうした日本人固有の宗教意識が潜在しているということが指摘されるのである。

また、五来重大谷大学名誉教授は、最近、日本の宗教に山岳宗教と海洋宗教の二つの流れの存することを指摘され、観音の補陀落渡海信仰が、日本古代から存在していた海洋宗教の延長上にあることを指摘しておられる。そして、この海洋宗教の基盤はやはり常世思想であったとみておられるのである。

補陀落信仰は、いうまでもなく浄土信仰の一形態である。しかし、こうした様々な説をふまえて補陀落信仰を見ると、それが阿弥陀信仰における浄土信仰とはまったくの対極に立つものであることが知られるのである。すなわち、阿弥陀信仰における浄土は現実世界とはまったく区別されているが、観音の補陀落浄土思想では、その浄土はこの現実世界の延長にあるとみなされ、さらにそれが一種の幸福の源泉とみなされているところに特色があるといえるのであり、ここには観音信仰の特徴である現世利益の思想が色濃く表れていると思われる。

とくに、補陀落が現実世界の延長、海の彼方に実在する浄土と信じられていた事実を示すものとして、たとえば、『吾妻鏡』第二十九の智定房という僧が三十日分の食糧をもって補陀落へむけて出発した話や、『発心集』三の船のかじの使い方を習い一人補陀落にむかった者の話などをあげることができる。

さらに、五来重大谷大学名誉教授の説として、補陀落信仰以前にその基盤となるべき海洋宗教が存在し、さらにこの海洋宗教が常世の思想をその源としていることをあ